

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

縄文時代の竪穴家屋にみる空間分節とシンボリズム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 公開日: 2023-02-09 キーワード: 竪穴家屋, 文化景観, 空間分節, 境界儀礼, イデオロギー強化 作成者: 谷口, 康浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001993

縄文時代の竪穴家屋にみる空間分節とシンボリズム

谷口 康 浩

要旨

家屋の構造や間取りは「文化景観」としての本質をもち、文化固有のイデオロギーやコスモロジーを表現する「観念としての景観」としての象徴性を有する。遺跡に残された竪穴家屋の姿も、過去の文化の観念・思考を物質化する側面をもち、「景観の考古学」の重要な研究対象となる。以上を立論の前提として、縄文時代の竪穴家屋にみられる象徴的な空間分節やシンボリズムを例示し、空間認知のパターンとその変化を検討した。竪穴家屋にみられる空間分節は、中期中葉以前と中期後葉以後とで主軸に対する意識や表現型が異なっている。中期中葉までは男女の性的原理と結びついた二元論的な空間分節が顕著であり、左右の空間分節、炉の区別による家屋の区分などに表現される。中期後葉以後は、奥壁部に聖的空間が創出されるとともに内外の境界が強く意識されるようになり、その結果成立した柄鏡形敷石住居では、主軸上や出入口での空間結界と儀礼が過剰なまでに発達した。中期末に出来た社会変動に対応して、イデオロギーの強化・再編が行われたことが、家屋景観の一連の変化から読み取れる。

キーワード

竪穴家屋、文化景観、空間分節、境界儀礼、イデオロギー強化

1. 文化景観としての家屋

近代科学の知識とは無縁であった縄文時代の人々が、世界や宇宙、時間や生死をどのように考えていたのかは興味深い問題である。人の認知能力や事物の分類、象徴化の能力、哲学的思考は、いったいどのように発達してきたのか。縄文人の思考を知るとは、現代考古学が探求するこうした大きな問題の解明にも寄与するはずである。

無限の星空の中に星座を認知し名前と意味を付与したように、人間は自らを取り巻く一つ一つのものに意味づけをして世界全体を主体的に捉えようとする。それを体系化し世界の根本的な成り立ちや事物の起源を説明しているものが「神話」にほかならず、生活空間や事物に意味と秩序を与えている。多くの古代社会が神話的な宇宙論をもっていたことはよく知られているが(ブラッカー・ローウェ編1976など)、縄文人もまた固有の世界観・宇宙論をもち、そのような観念的世界の中に生きていたにちがいない。

小林達雄は、縄文人が方位の観念や二至二分と太陽の運行との関係について詳しい知識をもち、その上に構成された自らの世界観を環状列石などの大規模記念物の設計に取り込み可視化していたことを力説している。そして、縄文人の心象景観が具現化さ

れたものを「縄文ランドスケープ」という概念で捉え、観念的に構成された世界のことを「縄文論理空間」と呼ぶのである(小林1996, 2005, 2009)。縄文人の観念的世界に根ざす文化的景観を「縄文ランドスケープ」と広義に捉えるならば、その造形表現は大規模記念物に限らず、生活空間や遺構・遺物の中にもさまざまな形で印刻されていると考えられる。

最も基本的な生活空間である家屋の構造や間取りもまた、文化に固有の観念形態(イデオロギー)と無関係ではない。「世界の諸民族は、いろいろな形で宇宙の構造を考え、また事物を分類している。伝統的な社会においては、家屋はこのような世界観ないし世界像の体系と無関係でないばかりか、しばしばその明瞭な表現でさえある」(大林1975:13)。家屋の成り立ちを「文化景観」として見る視点が必要とされる所以であり、そこに織り込まれた象徴的意味を注意深く読み解かなくてはならない。

たとえばアイヌの家屋チセ(図1)では、炉(アペオイ)や東窓(ロルンプヤラ)、東北隅の宝壇(ソパ)はアイヌの生活とさまざまな神(カムイ)との重要な接点として特別な意味を有していた(鷹部屋1943, 知里1950)。炉はアイヌが最も大切に敬う火の神アペフチカムイ(火の媼神)の鎮座するところ

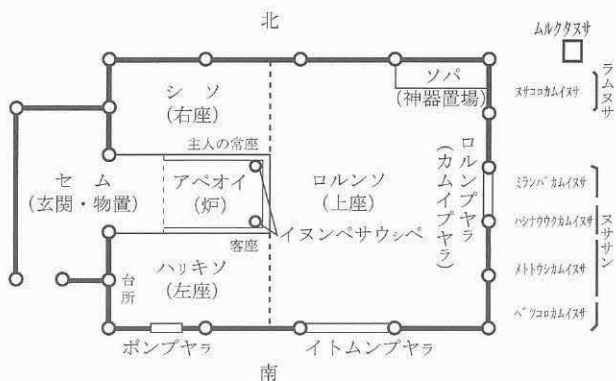


図1 アイヌの家屋チセ
高倉新一郎 1968「アイヌ家屋の調査」原図をもとに作成

であり、炉とその周り、とくに東側の空間は、火の神やさまざまな神への祈り（カムイノミ）が行われる重要な儀礼空間でもあった。火の神の仲介によって神々を招き入れ交流することができるという観念がその背景にある（山田1994）。シンヌラップと呼ばれる祖先祭を火の神の仲介のもとに行っていたところもある（久保寺1969，マンロー2002など）。炉の東側の両隅には、イヌンペサウシベと呼ぶ樹皮のついたままの木杭が打ち込まれ炉縁よりやや高く出ている。イナウ（木幣）や彫刻の削り台として使われるものであるが、これも火の神につながる特別な意味を有していた（高倉1968）。また神々の出入口とされたのがロールンプヤラと呼ばれる東窓（神窓）であり、人の出入口とは反対のこちらの小さな窓がチセの表玄関と観念されていた。「この窓が表玄関であればこそ、炉の北側が右座と呼ばれ、南側が左座と呼ばれるのである」（知里1950；77）。そのため人がこの神聖な窓を通して外からチセの中を覗くことは不敬とされ、忌み嫌われた。ソバはチセの守護神チセコロカムイを祀りイナウと神器を置くべき場所とされている。チセの家屋構造や間取りは実用的な機能性だけで決まっているのではなく、むしろその設計そのものがアイヌの宗教的生活と不可分の関係にあることが分かる。アイヌ文化固有の神観念や世界像を知らなければ、このような屋内空間の構造や意味を理解できない。このように、居住者たちのイデオロギーは生活空間にさまざまな意味づけをし、論理的な秩序を与えているのである。

家屋の構造や間取りは「文化景観」としての本質をもち、文化固有のイデオロギーやコスモロジーを表現する「観念としての景観」としての象徴性を有

する。遺跡に残された竪穴家屋や集落の姿も、過去の文化の観念・思考が物質化されたものであり、その意味で「景観の考古学」の重要な研究対象となるのである。文化景観を形づくる基本的な文化要素は「生態・機能」「社会構造」「イデオロギー」の三領域に跨るが⁽¹⁾、宗教的観念や世界像などのイデオロギーとそれに根ざすシンボリズムは、文化に固有の象徴と意味の体系であって、部外者による容易な解釈を許さない。遺跡として残された景観から過去の人々の観念・思考を読み解くことは難しく、集落論と呼ばれる分野においてもこの方面の研究が最も立ち遅れていると言わざるを得ない。

本論では、縄文時代の竪穴家屋⁽²⁾にも象徴的な空間分節やシンボリズムが実際にあることを例示する。縄文論理空間を構成していた観念と象徴についての本格的な研究はこれからであるが、最も身近な生活空間の中に構成された象徴表現を通して、彼らが認知していた世界のあり方を考えてみたい。

2. 縄文時代の竪穴家屋にみる空間分節とシンボリズム

(1) 主軸の重要性

竪穴家屋の平面形をほぼ相似形に二分できる中軸線を「主軸」と呼ぶ（橋本1976）。竪穴家屋の型式分類のための基礎的研究を行った橋本正は、大多数の竪穴家屋に共有された特徴としてこの主軸に注目し、主軸を中心に柱穴が規則的に配置されることから、主軸上に棟木が投影されるものとした。主軸はたしかに上屋の構造上の必要から生じてきたものと考えられるが、しかしそれだけではない。縄文時代、とくに中期以後の竪穴家屋において主軸が特別な意味をもっていたことは、奥壁部—炉—出入口を通る主軸上に石壇・石柱・埋甕などの特殊な施設がしばしば設置されることや、大形石棒の出土位置が主軸上に集中するあり方からも窺い知ることができる（山本1994，1996）。

前期までの竪穴家屋には、主軸に特別な意味が付与されていたことを示すはっきりとした特徴はまだほとんど確認できない。円筒下層d式期の楕円形家屋に現れる主軸端部の特殊土坑が祭壇状の施設であったとすれば、これなどが最も早い時期の例となる。竪穴家屋の主軸が特別なものとして意識され

るようになるのは中期以後のこととみられ、主軸に関係したシンボリズムや空間分節が中部・関東地方の集落遺跡の中に顕在化してくる。それはちょうど、中期に発達した環状集落において家屋群や墓壙群を複数のセクションに区分する「分節構造」が発現するのと同様であり（谷口2005）、社会構造と密接に関わる象徴的な空間分節が集落空間と屋内空間の双方に表現されるようになったものと考えてよいであろう。その延長上に成立するものこそ、中期末から後期前葉に盛行した「柄鏡形敷石住居」であり、主軸を強く意識した構造となっている。柄鏡形敷石住居の基本的構造は、主体部の平面形や柱穴配置、出入口部および前庭部の構造などを変形させつつ、後期中葉以降の家屋にも継承されていく⁽³⁾。

主軸が意識化されるようになることと、屋内空間に象徴的な区分や約束事が発露してくることとの間には、明らかに関連がある。竪穴家屋の主軸には、縄文人の観念的世界が端的に表現されていたという見通しが立てられるのである。縄文人の観念世界と論理空間を探る一つの重要な手掛かりとして、竪穴家屋の主軸とそれに関係した空間分節、シンボリズムを検討する必要がある。

以下、主に中部・関東地方の中期前葉から後期初頭にかけての事例を取り上げながら、どのような表現型が実際にあるのかを検討する。

(2) 左右の空間分節

主軸を境に屋内空間が左右に分割され個々に意味が付与されていたことを示唆する事例がある。

長野県棚畑遺跡100号住居址（中期中葉井戸尻式期）では、立石（自然石棒）と石皿が屋内の左右の壁際に対置された形で残されていた（棚畑遺跡発掘調査団編1990）。立石は長さ約60cmの自然石を用い、北東の壁際に掘られた大きな掘り込みを埋め戻して樹立されていた。周囲が硬い貼り床になっていることから、居住空間内に樹立されていたものとみてよい。そしてそれとちょうど反対側の壁際には、深い凹みを上にして1個の完形の石皿が置かれていた（図2左）。立石と石皿を左右の空間に対置した同様の出土状況は17号住居址と20号住居址にもみられ、対の関係を意識して配置されたことは明らかである。石棒と石皿を対にして生殖行為を隠喩的に表現した儀礼行為の痕跡が中期から晩期にかけて広く確認されているが（谷口2006）、この事例も男性・女性を象徴的に表したとみるのが自然である。そのように解してよければ、入口側からみて右側が男性的空間、左側が女性的空間として意識されていたことになる。屋内空間が性的原理によって象徴二元論的に区別されていた様子が窺える。主軸を境にした屋内空間の左右の区分を男女の場・間取りと推測する研究はこれまでもあったが（水野1969、田中1985など）、

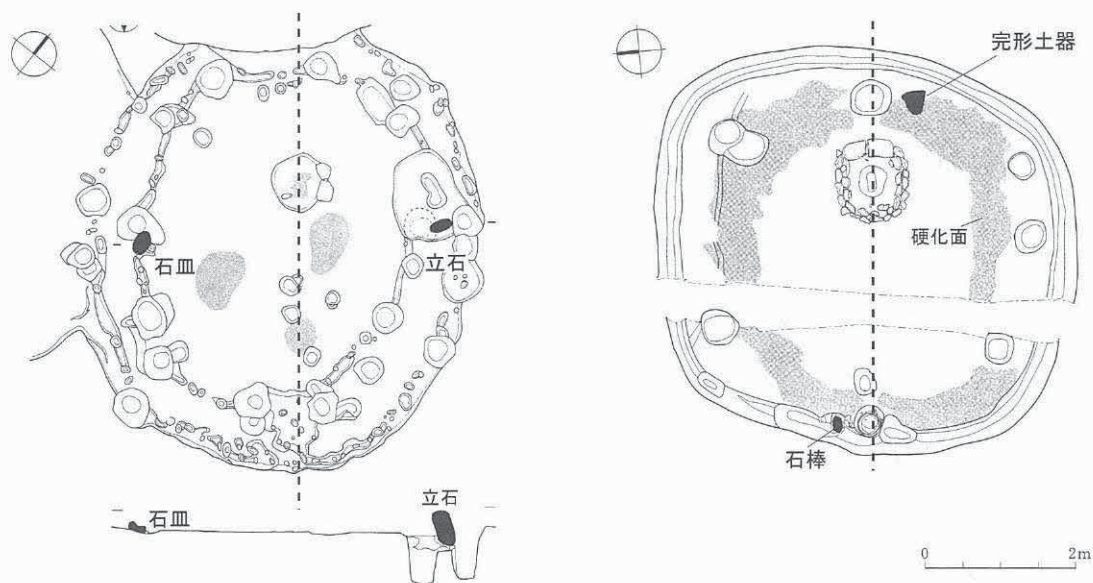


図2 左右の空間分節を示す例

左：長野県棚畑遺跡第100号住居址 右：神奈川県市ノ沢団地遺跡D区11号住居址
棚畑遺跡発掘調査団編 1990『棚畑』、市ノ沢団地遺跡調査団編 1997『市ノ沢団地遺跡』より作成

男女の居場所や座と断定するのはどうだろうか。むしろ、観念的世界を構成していた根源的な象徴的二元論が、男女の性的区分と結びつく形で表出したものと理解すべきではなかろうか。

屋内空間の左右の象徴的区分は、中期後葉の竪穴家屋にも認められる。櫛原功一は、長野県地域の中期の竪穴家屋において左右の空間に残された石棒・丸石などの性象徴遺物の出土位置を検討した結果、曾利Ⅰ式期以降に左側を男性区分、右側を女性区分とする二区分が明確化することを論じている（櫛原2009）。櫛原が想定する左-男、右-女の空間分節が広域に共有された統一的文化であったかどうかはさらに統計的に調べなければ分からないが、左右の空間分節が複数の遺跡・遺構で繰り返し表現されている点に重要な意味がある。

一方、小川岳人は、加曾利Ⅴ式期の竪穴家屋にみられる床の硬化面を観察した結果、家屋の主軸と炉のある中央部を避けるように入から左右に分かれる硬化面の特徴を見出した（小川2001）。炉を囲んで座が設けられていたという常識的な見方があるが、そのような生活光景を単純に想像するのは間違いかもしれない（図2右）。炉の周囲に板材が敷かれていた長野県北村遺跡SB555（後期中葉、長野県埋蔵文化財センター編1993）のように、何らかの敷物によって炉の周りだけ床面硬化が進まなかったという疑いもないわけではないが、出入口から柱に沿って円周的に形づくられた硬化面のあり方からもまた、家屋の主軸と左右の空間分節が強く意識され、屋内での行動にも何らかの導線や規制があったことが窺えるのである。

(3) 炉の象徴性と家屋の区分

橋本正はさまざまな竪穴家屋の型式にかかわらず炉が必ず主軸上にあるという重要な特徴を指摘した（橋本1976）。屋内炉には採暖・照明・調理・火種保存・燻乾などの実用機能が備わっていたであろうが、炉がふつう主軸上の中心付近に位置づけられるのは、やはりそこが家屋の中心として意識され、上述したアイヌのチセと同様に、何らかの象徴的な意味が認められていたからであろう。

炉に関連したシンボリズムや儀礼行為は、やはり中期以降、数多く確認されるようになる（金井1997など）。炉の象徴性を物語るものに、性象徴との結

びつきがある。たとえば中期後葉の中部地方では、石囲炉の一角または近傍に大形石棒を樹立した例が広く確認される（神村1995）。また、石囲炉の用材の中に大形石棒の断片や石皿を取り入れた例も中部・関東一帯でかなり高い頻度で見出される（嶋崎2008）。東京都大橋遺跡SI2（中期後葉、東京都埋蔵文化財センター編2003）、下野谷遺跡20号住居址（同、保谷市遺跡調査会編1999）などでは、石囲炉の対向位置に立石または石棒と石皿を配置した例が共通してみられるが、石棒と石皿を一對に用いて性交を隠喩的に表現することは、中期から晩期に広く確認される儀礼上の表現形式であり（谷口2006）、これらの事例でも石棒と石皿が男性と女性の象徴として観念されていたことはほぼ確実である⁽⁴⁾。

炉の象徴性を認めてよければ、炉の区別や型式の違いもまた何らかの象徴的区分の表現と解釈することができよう。こうした見方の妥当性を例証する事例が実際にある。

大形住居（ロングハウス）の最初の発見として著名な富山県不動堂遺跡2号住居跡（中期前葉）には、長軸上に4基の炉が並んでいるが、方形石囲炉と円形石囲炉の2種を含み、方・方/円・円の順に配列されている（富山県教育委員会編1974）。中心側の方形石囲炉と円形石囲炉にはそれぞれ埋甕が隣接して埋設されており、左右の空間の線対称構造を浮かび上がらせている。この家屋は単なる細長い空間ではなく、方形炉と円形炉の二項対立によって屋内空間がはっきりと二分されているのである（図3）。丹羽佑一は、同一住居内に方形と円形の対立する炉を有する事例がこの例の他にもあることに注目し、一住居構成員を越えて背後に存在する二集団の関係を表わすシンボリズムの一つと解した（丹羽1982）。方形炉と円形炉のこの区分が性的原理によるものであったという確証はないが、炉の象徴的区分によって居住空間に二項対立的な区分を作り出している点は、前述した左右の空間分節と共通している。

中部・関東地方の中期中葉、勝坂式土器文化では、屋内炉がきわめて多種に分化しており、同一集落の同一時期においても家屋によって炉に違いがあることが知られている（小葉1997など）。これらの勝坂式期の炉にも象徴性があるらしく、集落を構成する家屋の中に埋甕炉と石囲炉による二項対立的な区別

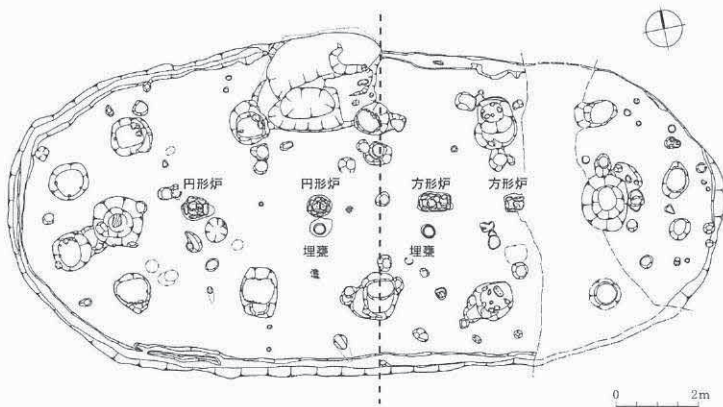


図3 方形石囲炉と円形石囲炉に象徴される屋内空間の二分割
富山県不動堂遺跡第2号住居跡
富山県教育委員会編 1974『不動堂遺跡』より作成

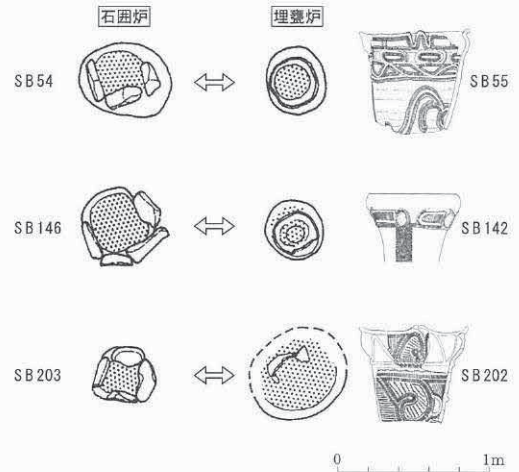


図4 炉形態による二項対立的な家屋の区分
東京都神谷原遺跡
八王子市柗田遺跡調査会編 1982『神谷原Ⅱ』より作成

が設けられている場合がある。東京都神谷原遺跡の勝坂2式期集落はこの構図が明瞭であり、炉に石を用いた家屋と土器を用いた家屋の二棟単位が複数集合して環状集落を構成している状態が看取される(図4)。この対の關係に着目した嶋崎弘之(1985)は、これを「男の家」「女の家」と解釈している。石囲炉と埋壺炉または石囲埋壺炉によって区別された類似の二棟単位ないし家屋群は、勝坂式期の他の集落遺跡にも見出せる⁽⁵⁾。

炉の区別が、家屋ないし居住者の社会的位置づけや帰属を象徴的に表示していることは十分にあり得ることである。方形と円形、石囲と土器などの形で表現されたこの区分を、性的原理によるものと解してよいのかどうかは、慎重に見極めなければならないが、二項対立的な炉による屋内空間あるいは家屋そのものの区別はたしかに存在する。そこにもやはり二元論的な象徴区分が読み取れるのである。

(4) 聖的空間の創出

主軸上の最も奥まった部分が聖的な儀礼空間として意識されていたことを示す事例がある。竪穴家屋内の間取りを論じた水野正好(1969)が「儀間」と捉えたこの空間には、たしかに特別な意味が付されていたようである。

中期後葉の中部地方と関東地方の一部では、「石壇・石柱」と称する祭壇状の施設を設けた竪穴家屋がみられる。この「石壇・石柱」が設置されるのは、主軸上の奥壁部分ないし炉に接した奥側が圧倒的に

多い(山本1994)。石壇・石柱の定義は研究者・報告書によって区々な面があり、範疇が明確でない点に基礎的な問題が残るが、樹立した石柱と石囲いをもつ典型的な祭壇状遺構の位置は、奥壁と炉の間にほぼ限定される(図5)。主軸を内外空間をつなぐ通路と考えると、外界からいちばん離れたところに位置づけられていることになる。神霊の宿る聖的な空間として観念されていたことはほぼ明らかであり、「石壇・石柱」はまさしくそれへの祭壇であったと推測される。

奥壁部分に大形石棒を樹立した事例も同様の意識を物語る。富山県二ツ塚遺跡21号住居では、炉と奥壁との間の空間に鏝をもつ完形の大形石棒が立てられていた(富山県教育委員会編1978)。当該住居の時期は古府式ないし古串田新式期であり、比較的古い例となる。中部高地の中期後葉には、奥壁部分に大形石棒を埋設して樹立した事例が散見される⁽⁶⁾。こうした事例の広がりからも、主軸奥を聖的空間とする観念が確立していく様子が窺える。

屋内の一隅に石柱を樹立する習俗は、中期中葉の勝坂式期に起源があるが、この段階の石柱の設置場所にはまだ奥壁を意識した規則性は認められない。ところが中期後葉になると、主軸上の奥壁部分を強く意識した形で石壇・石柱や石棒樹立例が顕在化してくるのである。これは次に述べる内外の空間結界とも密接に関係した変化であり、内外の境界が強く意識されるようになると同時に、主軸上の奥部に聖

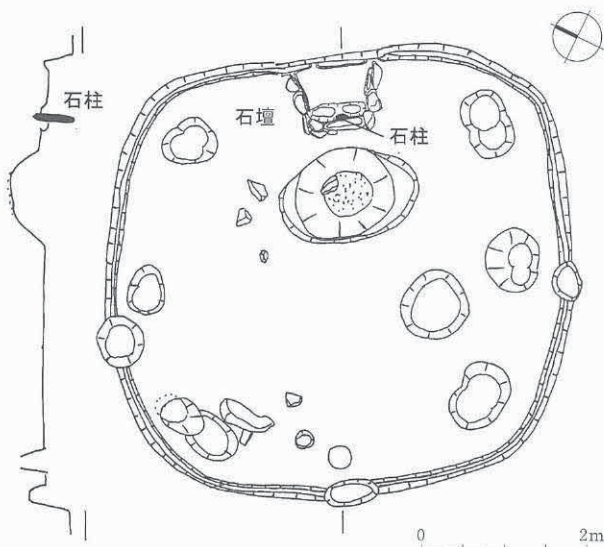


図5 奥壁部に石壇・石柱を設置した例
長野県マツバリ遺跡13号住居址
日義村教育委員会編 1995『マツバリ遺跡』より作成

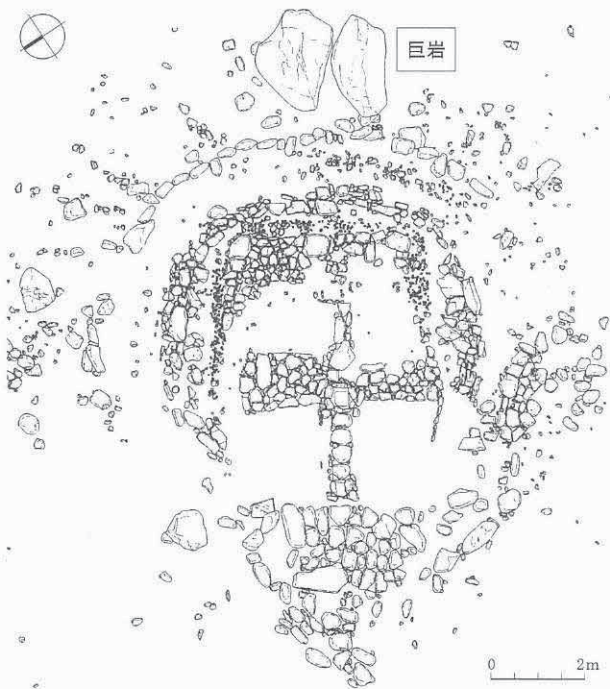


図6 聖的空間の守護を意識した柄鏡形敷石住居
山梨県塩瀬下原遺跡第4次1号敷石住居跡
山梨県埋蔵文化財センター編 2001
『塩瀬下原遺跡(第4次調査)』より作成

的な空間が作り出されたことが窺える。

石壇・石柱の発達がみられる中期後葉の中部地方では、石壇・石柱の有無に関わらず炉の位置が奥壁側に偏る傾向がはっきり現れる。そこにもまた、聖的な空間を炉(火)の力で守護する、あるいは神聖な炉(火)を外界からできるだけ遠ざけようとする意識が読み取れるのである。なお、中期後葉の甲信

地方には、石壇・石柱が位置づけられるのと同じ場所に一本の木柱を配した5本柱型式の竪穴家屋が広く分布しているが、炉が奥まって位置する分、炉と奥壁の間は狭く、人の座すことを許さない空間という見解が早くからあった(桐原1969)。炉の奥のこの木柱にも、聖的な意味が付与されていた可能性が高く、そのような観点からの精査が必要である。

柄鏡形敷石住居の成立、発達とともに「石壇・石柱」は消失していくが、同住居においても奥壁部分が一種神聖な空間として特別視されていたことを示す例がある。柄鏡形敷石住居では大形石棒が出土するケースが多いが、完形ないし略完形の石棒は奥壁部分からの出土が目立つ⁽⁷⁾(山本1996)。東京都伊皿子貝塚4号住居址(後期初頭称名寺式期)では奥壁部分が石列によって区画されている(港区伊皿子貝塚遺跡調査団編1981)。山梨県塩瀬下原遺跡1号敷石住居跡(後期前葉堀之内1式期, 山梨県埋蔵文化財センター編2001)の場合は、奥壁部分の背後に天然の巨岩が位置し、さらに石積みを築いて家屋の背後を念入りに固めている(図6)。このような事例からも、主軸奥の神聖な空間を守護しようとする強い意識が如実に読み取れるのである。

(5) 内外の結界と境界儀礼

中期末～後期前葉の中部・関東地方一帯で、出入口部分が細長く伸びた形の柄鏡形敷石住居が発達したことは周知のとおりである。その特殊な出入口は単なる出入りのための通路ではなく、主軸上に屋内空間と外界との境界を作り出す性格を備えていた。柄鏡形敷石住居の柄部から炉に至る直線部分が通路として意識されていたことは、この部分への敷石行為が最も高頻度であることや敷石構築の入念さから窺い知ることができる(図7)。屋内と屋外とを行き来する通路として実際に機能していたことは間違いないが、同時にそこは主軸上の内外の境界として強く意識された空間でもあり、境界部分の結界ならびに儀礼行為の痕跡が高い頻度で見出される。

内外の結界に関係した最も重要な構造が「埋甕」と呼ばれる埋設土器である。柄鏡形敷石住居における埋甕の埋設位置には強い規則性があり、住居主体部と柄部との接続部、柄部先端、およびその両方の事例が圧倒的に多い事実がこれまでの研究ですでに明確となっている(川名1985、山本1996・97)。そ

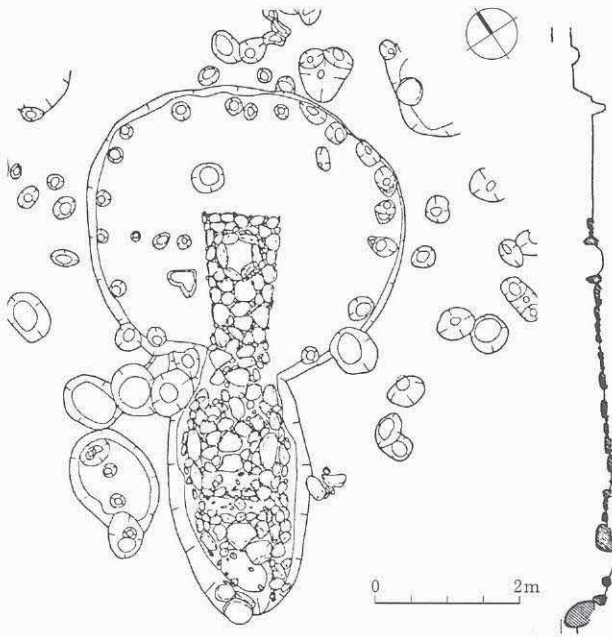


図7 内外空間をつなぐ通路を入念に造作した柄鏡形敷石住居の例
 神奈川県南足柄市塚田遺跡SI-03
 神奈川県立埋蔵文化財センター編 1996
 『敷石住居の謎を探る資料集』より作成

こは内側空間と外側空間とを接続する空間的な変換点にあたる(図8)。川名広文は柄鏡形敷石住居における埋甕の埋設位置の規則性を明らかにするとともに、その埋設姿勢にも一つの有意な傾向があることを指摘し、主体部の中心方向(炉の方向)に向けて傾斜させた斜位埋設に重要な意味があると考えた。川名の解釈はこうである。「中心方向に平行に傾斜、照射する対の埋甕は、まさに三次元の空間ベクトルとして、住居空間を同心円的な円錐状に分割するランドマーク(境界標)であると言え、換言すれば「周縁」／「中心」という空間分割を表象するシンボルとみなすことができよう」(川名1985; 83-84)。川名は、柄部の意味を住居内空間と外界との間の過渡的、両義的空間と捉え、だからこそ境界を意識させる埋甕とそこでの儀礼行為が必要であったと解釈した。中期後葉に発達する埋甕の性格については、死産児・嬰兒埋葬説、胎盤収納説などの諸説があって決着していないが、埋設位置・埋設姿勢の強い規則性から判断すると、埋葬や収納の機能を推定するよりも、やはり境界標もしくは結界としての象徴的な意味を考える方が妥当である。川名が指摘するとおり、該期の埋甕の口縁部がしばしば床面から大きく突出しているのも、それを意識的に跨ぐべきものであった

からであろう。山本暉久は柄鏡形敷石住居の発生について、中期後葉の竪穴家屋の出入口に設置された埋甕部分が拡張したものとの見解を早くから提起していたが(山本1976)、一見飛躍的なこの変化もそう考えてこそ合理的に納得がいくのである。

内外の境界に対する意識の強さは、次のような事例の存在からも読み取ることができる。主体部と柄部の接続部に、埋甕以外の構造物で境界を作り出した例が散見される。長野県三原田遺跡群7号・18号住居跡、岩下遺跡43号住居跡、郷土遺跡3号・124号住居跡など、佐久盆地の中期末～後期初頭の柄鏡形敷石住居には、主体部と柄部の接続部もしくは柄部先端に大形の軽石製石鉢を設置した例が散見される(長野県埋蔵文化財センター編2000)。長野県平石遺跡15号住居址(後期前葉堀之内1式期、望月町教育委員会編1989)では、主体部と柄部の境界に平板な河原石を横向きに立てた框石が埋め込まれている(図9)。群馬県小室遺跡例(後期初頭称名寺式期、群馬県史編さん委員会編1988)では、主体部との境から約97cmの長さにわたって柄部の敷石が一段高くなっており、その高台を上り下りしなければ通過できないようになっている。柄鏡形敷石住居の柄部にはこのような結界装置がしばしば見られることを、村田文夫も例示し注意しているが、きわめて妥当な解釈である(村田2006)。

主体部と柄部の接続部に設けられるいわゆる「対ピット」も、結界を強く意識した構造となっている(図10)。川名は、対ピットが主体部の中心に向かってハの字状に狭まり掘形が深くなる特徴を指摘し、故意に狭間を作り出しているものと解した(川名前掲)。村田も対ピットの間隔が40～50cmで大人が辛うじて通過できる狭さである点を同様に解釈している(村田前掲)。

柄鏡形敷石住居の主体部—柄部接続部や柄部では、埋甕以外に大形石棒や石皿の出土もとくに目立っており、これらも結界に関連する強固な観念とさまざまな儀礼行為の痕跡と考えてよいであろう。内外の区別と境界の意識がここまで過剰になっていた理由が知りたい。中期中葉～後葉に発達した拠点的な環状集落が解体し小規模な居住単位に分散化した中期末・後期初頭の社会変動の原因と、それは密接な関連を有していたはずである。

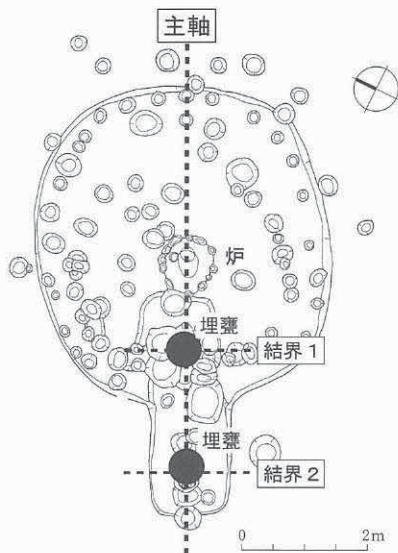


図8 埋甕の埋設位置と境界意識
 神奈川県羽沢大道遺跡10号住居址
 羽沢団地内遺跡発掘調査団編 1993
 『羽沢大道遺跡発掘調査報告書』より作成

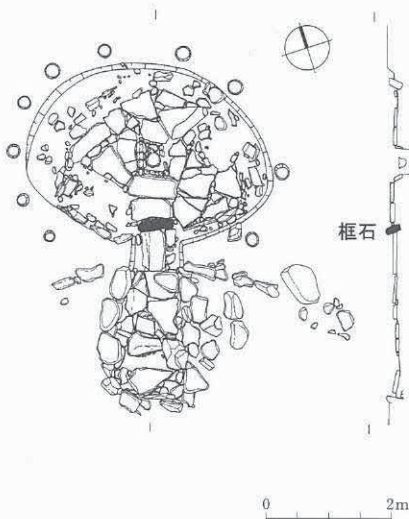


図9 境界に設けられた框状の仕切り
 長野県平石遺跡第15号住居址
 望月町教育委員会編 1989
 『平石遺跡』より作成

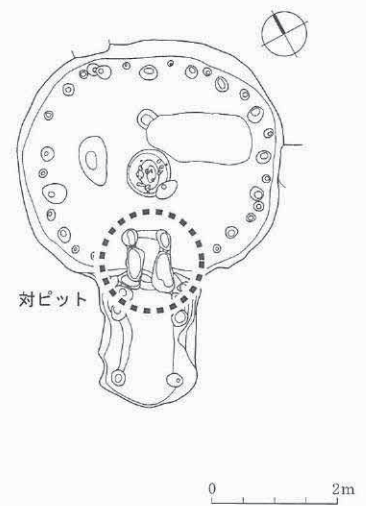


図10 境界に狭間を作り出す対ビット
 神奈川県鳥居前遺跡J2号竪穴住居址
 かながわ考古学財団編 2002
 『用田鳥居前遺跡』より作成

3. 考察 一家屋のシンボリズムに表れたイデオロギー強化とその背景

中期になると竪穴家屋において象徴的な空間分節やそれに関わる儀礼行為が顕著に認められるようになる。この変化は、大形石棒や土偶の増加、物語性文様の発達といった事象とも軌を一にしたものであり、象徴的・神話的世界像の体系化を背景とした大きな変化の一部と考えることができるであろう。縄文家屋のシンボリズムについての本格的な研究はこれからであるが、以上の事例整理から気づく問題とその意義について考えてみたい。筆者が注目するのは屋内空間のシンボリズムに認められる変質であり、中期末以降、過剰なまでに発達した屋内儀礼行為に映し出されたイデオロギー強化とその背景である。

中期の竪穴家屋にみられる空間分節の表現を時期的に通観してみると、中期前葉～中葉と中期後葉以降とは主軸に対する意識や空間分節のあり方が異なっており、観念上の変化が認められる。中期前葉～中葉にまず顕著に現れるのは、対照的な二者を区分する二項対立的な空間分節である。主軸を境とした左右の空間分節、石囲炉と埋甕炉を象徴とする家屋の区分などの形でそれが表現されている。男女の性的原理とも結びついた二元論的な象徴的区分が、該期のシンボリズムの基調となっているように見える。それに対して、中期後葉から末葉になると、左

右の空間分節が無くなるわけではないが、主軸に対する意識が一層強まるとともにむしろ内外の境界が強く意識化されるようになり、屋内主体部においても外界から最も遠い位置に聖的空間が創り出されるようになる。おそらく主軸は内/外、中心/周縁、聖/俗の異質な領域を貫く世界の基軸のように観念されており、各領域の境界に対する意識が過敏になっているところに、該期のシンボリズムの特徴が見出せる。二元論的な並列的・対照的な空間分節よりも、異界の境界や移行に対する意識が非常に強まっているように見えるのである。その延長上に成立した柄杓形敷石住居は、こうした観念を具現化する小宇宙であったとも言える。

そこに看取される、並立的・対向的な関係表現から移行的・境界的な区分への意識上の変化は、同時に進行した集落の歴史的動向を考え合わせてみると、きわめて興味深い問題をあぶり出すものとなるのである。中期中葉から後葉に著しい発達をみせる環状集落では、家屋群や墓墳群を複数のセクションに区分する分節構造が際立った特徴となって発現しており、なかでも全体を直径的に二分する二大群の構造が最も普遍的なものとなっている。分節構造の発達には、出自・系譜観念の強まりに基づく親族組織の分節化を表すものと筆者は理解しているが(谷口2005)、居住空間の直線的区分は、端的に言えば、

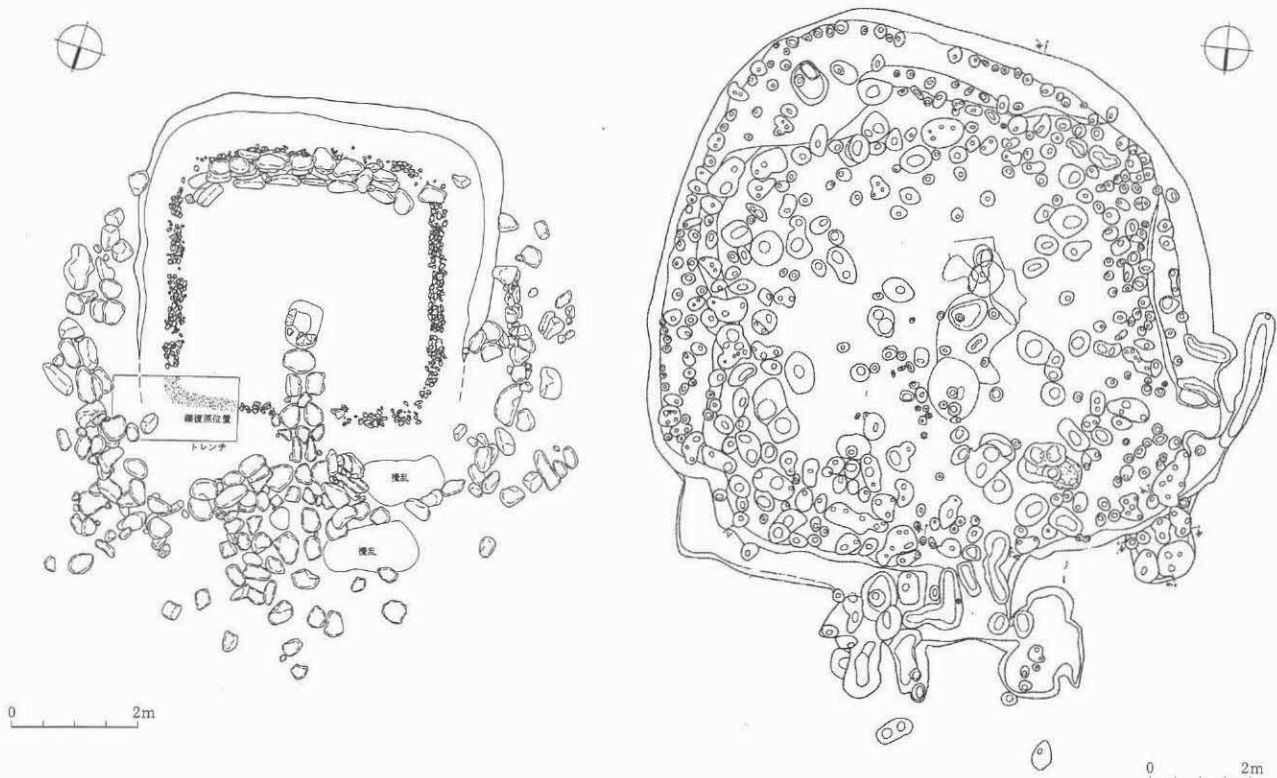


図11 柄鏡形敷石住居の空間構造を継承する特殊家屋

右：神奈川県相模原市青根馬渡No.4遺跡J1号敷石住居址（後期中葉） 左：千葉県君津市三直貝塚SI-004B（後期末）
 かながわ考古学財団編 1999『道志川導水路関連遺跡』、千葉県教育振興財団編 2006『君津市三直貝塚』より作成

そのような分節的部族社会の社会構造に根ざした観念形態でありシンボリズムと考えることができる。中期中葉の家屋に象徴二元論的な空間分節がまず顕著に現れたのも、こうした社会構造を反映したものと考えられる。

しかし、中部・関東地方の広い範囲で環状集落がほぼ一様に解体していく中期末葉になると、屋内空間のシンボリズムにも既述のような大きな変化が生じてくるのである。内外の結界、聖的空間の創出という形での屋内シンボリズムの強化は、中期末～後期初頭を覆った社会的変動に何らかの形で関連していたと予想され、内と外、身内と他者、生と死などの根本概念を含め世界像と秩序を再編、強化しようとした意識が感じられる。因みに言えば、中期後葉から後期初頭になると成人骨を納めた再葬土器棺墓が出現し、葬制上にも大きな変化が起こるが⁽⁸⁾、これは生と死の境界・過渡・移行に対する意識が非常に強まっていたことを意味するものである。そのように考えると、再葬の始まりもまた、屋内空間における結界と境界儀礼と同じ観念に発したイデオロギー強化の一つの発露とみることができる。柄鏡形

敷石住居とは、いわばこうした観念変化を物質化、可視化するものであったと理解することができよう。聖的空間を創出し、炉の機能を強化し、特殊な出入口を作り出して外界との境界儀礼を強化するそのあり方からは、家系や家族を守護しようとする強烈な意識が伝わってくる。

柄鏡形敷石住居内に残る祭儀行為の痕跡はそれ以前の段階に比べて明らかに高い頻度で見出され、それは個々の家族ないし世帯が葬儀や儀礼祭祀を個別に行うまでに社会単位としての自立性を強めていた様子を映し出している。後期前葉になると、柄部に接続する前庭部に配石や柱列を施設する例や墓群を造営する例が現れ⁽⁹⁾、柄鏡形敷石住居に伴う祭儀行為はさらに拡大の様相をみせる。そして後期中葉になると、こうした動きの中から、儀礼祭祀に特別な役割を担うやや特殊な家屋が析出してくるのである。「核家屋」(石井1994)、「環礫方形配石遺構」(鈴木1978)、「大形住居」(吉野2007)などと呼ばれる特殊な家屋群がそれであり、儀礼祭祀を管掌する特定個人ないし特殊階層が出現したことを強く示唆している。それらがいずれも柄鏡形敷石住居の特徴であっ

た出入口の構造を継承している事実(図11)は、後期に進行した社会の複雑化が、屋内空間のシンボリズムに表出したイデオロギー面の強化・再編と密接不離に関係していたことを暗示しているのである。

結言

縄文時代の家屋や集落の空間構成には、縄文人の観念的世界に根ざすシンボリズムやコスモロジーがさまざまな形で表現されている。私たちはこの点を正しく認識すべきであり、文化景観の要素を諸現象の中に発見する努力を傾注しなければならない。縄文人と文化を共有できない現代の私たちが彼らの世界観・宇宙論の全体を復原して理解することは無理だが、論理的に正しい秩序ある生活空間を縄文人たちが主体的に創り出していた様子を読み取ることはできる。景観の考古学が目指すのは、そこに縄文人の思考や認知のパターンを紐解く手がかりを見つけ出すことである。

謝辞 図版作成にご協力いただいた國學院大學文学部助手中村耕作氏に深く感謝します。

註

- (1) 家屋や集落などの生活空間は、居住集団の生態や経済生活、社会組織や社会制度、文化習俗と信仰などの多様な文化要因から析出されてきた「文化景観」を備えている。考古学の研究対象である住居跡や集落跡の姿もまさしく文化景観の印影、残像と理解すべきものである。文化生態的な機能性を強調すれば「機能としての景観」、社会構造の反映という側面を強調すれば「社会構造としての景観」、象徴的な意味の表現と観るなら「観念としての景観」となる。文化景観のコンテキストは、こうした複眼的な視点をあわせもち、あらゆる要素の体系的な関連と脈絡を知ってはじめて理解することができる(谷口2009)。
- (2) 「竪穴住居」という一般的な用語に代えて、本論では文化景観復原という研究目的により適した「家屋」の語を用いたい。「住居」は人のすみか、住まいを意味するのに対して、「家屋」は建物を指す言葉である。「竪穴住居」の家屋としての構造や住まい方が詳しく解明されていない現状からすれば、「竪穴建物跡」または「竪穴家屋跡」と表現する方がより適切である。ただし、「柄鏡形住居」などの定着した学術用語や報告書に記載された固有の遺構名称まで変えるわけにはいかないので、混用は止むを得ない。

- (3) 林謙作は、後期・晩期に盛行する環状列石や環状巨木柱列の空間構成と柄鏡形敷石住居の類似点を指摘し、共通する思考観念が大規模記念物の設計・築造にも取り込まれていた可能性を論じている(林1997)。
- (4) 中期の炉にしばしば石棒や石皿が伴うことは事実であるが、柄鏡形敷石住居の埋甕の周囲にも石棒や石皿がよく付設されているところから推量すると、これは炉に限った行為とは言えず、炉の男性格・女性格を象徴するものとみても、むしろその場、そのモノがもつ呪力・靈力を強化する目的の儀礼と考えるべきかもしれない。
- (5) 長野県居沢尾根遺跡の井戸尻Ⅲ式期、長野県俎原遺跡の井戸尻式期、東京都宇津木台遺跡D地区の勝坂2-3式期、東京都滑坂遺跡の勝坂3式期など。
- (6) 長野県増野新切遺跡B13号住居、長野県瑠璃寺前遺跡3号住居など。
- (7) 神奈川県三の丸遺跡EJ2号住居、鳥居前遺跡J2号住居、群馬県西小路遺跡6号住居、山梨県郷蔵地遺跡1号住居など。
- (8) 群馬県板倉遺跡(加曾利E3式期)、長野県中原遺跡(曾利Ⅲ式期)、埼玉県坂東山遺跡(称名寺式期)など。
- (9) 長野県岩下遺跡、長野県北村遺跡、群馬県行田梅木平遺跡、神奈川県三ノ宮・下谷戸遺跡、神奈川県曾谷吹上遺跡など。

引用文献

- 石井 寛 1994 「縄文時代後期集落の構成に関する一試論—関東地方西部域を中心に—」縄文時代5, 77-110頁
- 大林太良 1975 「住居の民族学的研究」『日本古代文化の探求 家』11-73頁, 社会思想社
- 小川岳人 2001 「竪穴住居址の屋内空間—民俗・民族誌との隙間に—」神奈川考古37, 31-49頁
- 金井安子 1997 「縄文人と住まい—炉の処理をめぐって—」青山考古14, 1-17頁
- 神村 透 1995 「炉縁石棒樹立住居について」『王朝の考古学』20-31頁, 雄山閣
- 川名広文 1985 「柄鏡形住居址の埋甕にみる象徴性」土曜考古10, 73-95頁
- 桐原 健 1969 「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」古代文化21(3・4), 47-54頁
- 櫛原功一 2009 「縄文時代中期の竪穴住居における空間分割」帝京大学山梨文化財研究所研究報告13, 95-110頁
- 久保寺逸彦 1969 「アイヌの祖霊祭り(シンヌラツパ)」『アイヌ民族誌』577-595頁, 第一法規出版
- 小栗一夫 1997 「『住居型式』設定のための基礎的作業—多摩丘陵・武蔵野台地の縄文中期炉跡の分析から—」東京考古15, 74-80頁
- 小林達雄 1996 『縄文人の世界』朝日選書
- 小林達雄 2005 「縄文ランドスケープ—自然的秩序からの独立と縄文的世界の形成—」『縄文ランドスケープ』9-

- 19頁, アムプロモーション
- 小林達雄 2009 「縄文時代中期の世界観—土偶の履歴書—」『火焰土器の国 新潟』8-26頁, 新潟日報事業社
- 嶋崎弘之 1985 「東京都神谷原の勝坂Ⅱ期集落—報告書『神谷原』の分析から—」土曜考古10, 97-106頁
- 嶋崎弘之 2008 「縄文人の性行動」埼玉考古43, 135-158頁
- 鈴木保彦 1976 「環礫方形配石遺構の研究」考古学雑誌62(1), 1-13頁
- 高倉新一郎 1968 「アイヌ家屋の調査」『アイヌ民俗資料調査報告』1-25頁, 北海道教育委員会
- 鷹部屋福平 1943 『アイヌの住居』彰国社
- 田中 信 1985 「住居空間分割に関する試論」土曜考古10, 1-25頁
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 谷口康浩 2006 「石棒と石皿—象徴的生殖行為のコンテクスト—」『考古学Ⅳ』77-102頁, 安齋正人
- 谷口康浩 2009 「縄文時代の生活空間—『集落論』から『景観の考古学』へ—」『縄文時代の考古学8 生活空間』3-24頁, 同成社
- 知里真志保 1950 「アイヌ住居に関する若干の考察」民族学研究14(4), 74-77頁
- 丹羽佑一 1982 「縄文時代の集団構造—中期集落到於ける住居址群の分析より—」『考古学論考』41-74頁, 平凡社
- 橋本 正 1976 「竪穴住居の分類と系譜」考古学研究23(3), 37-72頁
- 林 謙作 1997 「縄文巨大施設の意味」『縄文と弥生』54-64頁, クバプロ
- ブラッカー, C.・ローウェ, M.編 (矢島祐利・矢島文夫訳) 1976 『古代の宇宙論』海鳴社
- マンロー, N.G. 2002 (B.Z.セグリマン編, 小松哲郎訳) 『アイヌの信仰とその儀式』国書刊行会
- 水野正好 1969 「縄文集落復原への基礎的操作」古代文化21(3・4), 1-21頁
- 村田文夫 2006 『縄文のムラと住まい』慶友社
- 山田孝子 1994 『アイヌの世界観』講談社
- 山本暉久 1976 「敷石住居出現のもつ意味」古代文化28(2), 1-37頁, 同28(3), 1-29頁
- 山本暉久 1994 「石柱・石壇をもつ住居址の性格」日本考古学1, 1-26頁
- 山本暉久 1996 「柄鏡形(敷石)住居と石棒祭祀」縄文時代7, 33-73頁
- 山本暉久 1996・97 「柄鏡形(敷石)住居と埋甕祭祀」神奈川考古32, 133-152頁, 同33, 49-83頁
- 吉野健一 2007 「房総半島における縄文時代後・晩期の大型住居」『縄紋時代の社会考古学』189-210頁, 同成社
- 発掘調査報告書(本文中の引用資料のみ)**
- 群馬県史編さん委員会編 1988 『群馬県史 資料編1』群馬県
- 棚畑遺跡発掘調査団編 1990 『棚畑』茅野市教育委員会
- 東京都埋蔵文化財センター編 2003 『大橋遺跡—第3次調査—』東京都埋蔵文化財センター
- 富山県教育委員会編 1974 『富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概報』富山県教育委員会
- 富山県教育委員会編 1978 『富山県立山町ニツ塚遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター編 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター編 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19 小諸市内3』長野県埋蔵文化財センター
- 保谷市遺跡調査会編 1999 『下野谷遺跡 第7次調査報告』保谷市教育委員会
- 港区伊皿子貝塚遺跡調査団編 1981 『伊皿子貝塚遺跡』港区伊皿子貝塚遺跡調査会
- 望月町教育委員会編 1989 『平石遺跡』望月町教育委員会
- 山梨県埋蔵文化財センター編 2001 『塩瀬下原遺跡(第4次調査)』山梨県教育委員会